

「特集」  
かかわる

# 形

forme



日文の実践事例、教科情報

詳しくはWebへ!

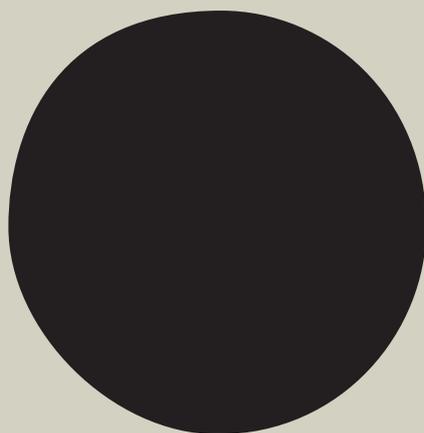
日文

検索

# 开 + 多

Nr.01

かたちについて、ここで、あらためて。





特集

# かかわる

西村徳行  
先生

筑波大学附属小学校

山田芳明  
先生

鳴門教育大学

子ども同士、子どもと教師、材料や用具。  
図画工作・美術は様々な「かかわる」時間で構成されている。  
社会に必須ともいえる「かかわる」力を  
これほどに内在している教科はあるだろうか？  
実際に子どもたちは活動の中でどのようにかかわるのか  
かかわること何が生まれているのか。



現場の先生方が元気になる研究会をとの思  
いから「図工授業づくりユニオン」を立ち  
上げた二人。西村先生の授業に山田先生が  
参加しその直後、授業の熱気がまだ残る図  
工室にて話し合っていた。いた。

### 「見たい」気持ちにさせるには

**山田** 授業おつかれさまでした。すごいテンションだね。あのテンションで、のどが枯れたりしないの？

**西村** 前に野球部の監督をしていた時、声を張り上げてましたから大丈夫です（笑）。

**山田** この授業は初めてですか？

**西村** たぶん二回目ですね。今回のように、紙の裏にサインをする展開は初めてです。友だち同士もつとしっかり見て欲しいというのがあって、こういう形にしました。

**山田** 見て欲しいというのは、もっと詳しく言うとうどういうこと？

**西村** 低学年の子どもたちは「見せたい」という気持ちはあるんですけど、「見たい」というのはなかなかないですね。お互いに「見て欲しい」「見たい」という気持ちになるためには、今回のように痕跡を残すのが必要かなと考えました。クイズ形式にすると「見たい」という気持ちが増すし、友だちとのかかわりが形で残るように、裏にサインと答えを書くことにしました。答えを書いてもらうと、ほかの子が書いたことも見られるので、発想を広げることにもなりますしね。また、僕にとっては、サインと答えが一人ひとりの子どもの姿を理解することにもなります。

**山田** 僕が接してみても面白いと思ったの

## 授業レポート

見る人のことを考えて作品をつくる、友だちがつくったものをじっくり見る、作品について話をする——作品を媒介に人とかわり合い、そこから新たな発想やつくる楽しさを見つけていく、そんな授業が筑波大学附属小学校で行なわれた。

図工室の机の上には、色とりどりの画用紙が山のように積まれていた。前の時間に、はさみを使っていろいろな切り方を試しながらつくったものだ。西村徳行先生が子どもたちに声をかけた。「前の授業では、はさみで色紙を切って、いろいろな切り方を楽しみましたね。この時間は、これです」と言って、黒板に文字を書いた。`なににみえるかな。`

「これをもうちょっと難しく言うとうどうなるかな?」の問いに「見立てる」という答えが出た。「見立てるという言葉が出てきたよ。では、これは何に見える?」と言って、先生が不思議な形の色紙を貼った画用紙を見せた。元気な声とともにたくさんの手が上がる。「亀!」と答えた子に、先生が問いかける。「どこが頭でどこが体?」。「頭はこっちに隠れてて、これは体なの」。「なるほど、これは亀全体じゃないんだ」。次の子は「海の上に立ってる石でね、石の上におじさんが立ってそう」と答えた。「どうして海だと思ったの?」と聞かれると、「青いところが水で、緑のところが石に見えたから」。「形だけじゃなく色も見たんだね。ではもう一人」。「本州!」と元気よく答えた子。「本州? 青森はどっちかな?」と、ユニークな答えに先生も驚いた様子。すると「青森はもっと向こうの方。右が千葉県で、真ん中が東京都、それで、左端が静岡県」と得意顔で答えてくれた。



は、一発で当てられるのはちょっと嫌、でもまったく当たらないというのもさみしいんだよね。あれは子どもたちの心理だなと思って。ちょっとわからないとすぐうれしそうな顔をして、そこでヒントを求めると言ってくれて、当たるとまたすぐうれしそうな顔をするんだよね。

**西村** クイズってすごく面白くて、答えが簡単すぎても難しすぎても飽きてしまうんです。やっぱりこれはコミュニケーションなので、相手のことを考えて問題をつくるのがすごく大切なんです。

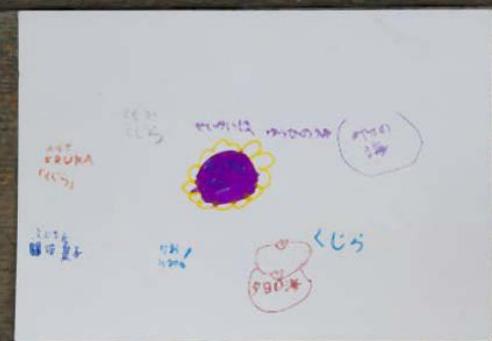
**山田** 例えばこの作品、猫のしっぽなんだった。普通は一つのまとまった形と考えますよね。でも猫のしっぽって言われたら、色も形もそうだよ。部分だけを見立てるのがすごく面白いなと思ったね。

**西村** 導入のときに、最初に「亀」という答えが出ましたよね。あのとき彼は、亀の顔は紙の外にあると言いました。そういうやりとりがあったから、この作品が出てきたのかもしれないですね。

**山田** 「本州」もすごかった! 導入で質問して子どもを当てる時、考えて当てるの? この子を当てたら見方を広げてくれるな、みたいな。

**西村** そうですね。このクラスは担任をしているということが大きいです。今までは専科だったのでわからないこともありましたが、担任をしていると普段の教室での様子がわかるので、答えてもらう子どもについては意識しますね。「本州」と言った子は、けっこう変化球を投げてくれるんです。

**山田** 確かにあの導入で見方が広がったところがありますね。子どもと先生とのかかわりの中で出てきた活動でもあるんですね。



「いま、みんながいろいろな見立てをしてくれました。今日は見立てるだけじゃなくて、これをクイズにしようと思います」と西村先生。クイズと聞いて子どもたちの顔が輝いた。最初に先生が見せたように、机の上の色紙の中から好きなものを選んで白い画用紙に貼る。そして、友だちに見せて考えてもらい、「何に見えたか」と「サイン」を書いてもらうのだ。「あとひとつとっても大切なこと！ 答えが難しすぎても簡単すぎてもつまらないよ。どれくらいの難しさにするか、よく考えよう。では、はじめましょう」。

この色紙は、半年ほど前に「ローラー遊び」の題材でつくったもので、にじんだり、複数の色が混ざったり重なっていたりして、とても表情豊か。子どもたちは形だけでなく、色の具合も見て選んでいるようだ。あっという間に一枚目のクイズが完成し、友だちに見てもらおうと席を立つ。図工室のあちこちで子どもたちは、画用紙をはさんで言葉を交わす。「これ、な〜んだ?」。すぐに答えが出てくるものもあれば、向きを変えて見ないとわからないものもある。答えを言ったときの子どもたちの反応も、ヒントをくれる子、すぐに答えを教えてくれる子、答えが出るまでニコニコ顔で待っていてくれる子と様々だ。友だちと床に座り込んで話したり、反対にたくさんの友だちに見せるために急いでいたり、もう次のクイズをつくり始めていたり……一つの題材の中で、子どもによって多様な活動が生まれていたのが印象的だ。

西村先生は、終始子どもたちに取り囲まれていた。「これ何かわかる?」と次々にクイズを出しにくる。先生が優しく答えると、「なんでわかったの?」「違よよ〜!」とうれしそう。みんな西村先生が大好きなのが伝わってくる。今日はじめて出会った山田芳明先生のところにも、子どもたちが駆け寄っていく。山田先生のチャーミングな表情とユニークな答えにキャッキヤと笑い声を上げて会話を楽しむ子どもの姿があった。

授業の終わりに全員で床に落ちた色紙を拾い集めた。「この紙は宝物だから残しておきます」と西村先生は子どもたちに言った。残った色紙はまた別の題材で使うのだ。先生が「形を捉えた人と色を捉えた人がいましたね」と、今日のまとめを話して授業は終了。つくる面白さとともに、人とかかわることの楽しさを知った今日の図画工作の時間。子どもたちは満ち足りた表情で図工室を後にした。

## 授業レポート

### 子どもとつくり上げる

**山田** レベル1、レベル2と、段々難しくなる問題をつくった子がいましたね。

**西村** この子は、周りの子に「簡単すぎる」って言われて、多分自分でもわかったんですよ。僕のところを持ってきた時に、すごく恥ずかしそうに「これなんだ?」って聞くんで、「階段」と答えたら、小さな声で「うん」って。もっと工夫すればよかったという顔をしていて。それで、新しくレベル2をつくったんでしょね。

**山田** 先生が二枚目つくってもいいよ、と声を掛けたんですね。普段からそれは認めているの?

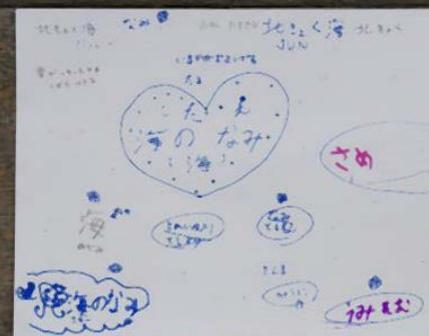
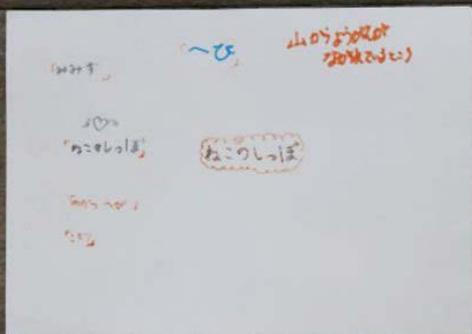
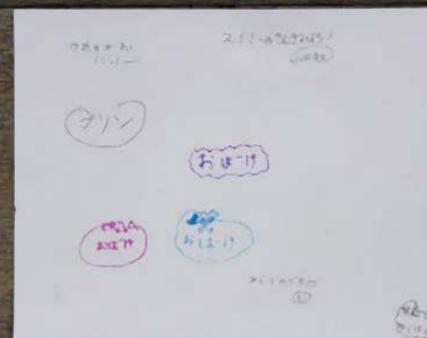
**西村** はい、思いついたらもっとやっていいよと言っています。

**山田** 一つできて終わりじゃなくて、友だちとのやりとりの中からレベル2の作品を生み出したのいいですね。

**西村** 普段だと一つで納得する子なんですけど、友だちとかかわっていく中で、もう一つつくるうという気になったんでしょね。やっぱり友だちがいることの意味があるんですよ。僕はレベル2を見ていないですから、最後の最後につくったんだと思います。僕が見た時はレベル1しかなくて、レベル1とも書いてなかったんです。

**山田** そういう意味では、この子にとってこの授業がブレイクスルーのきっかけになるかもしれないですね。もう一つこの作品が面白いのは、ほかの子は色の面を表に出しているのに、この子は色の面を裏にして台紙に貼ってしまったんですよね。

**西村** 形を見せたいから裏にしたんでしょ。色は邪魔だと思ったんですね。



山田 それはすごく子どもらしい発想だよ。先生は、色紙をつかったことからこの授業をやっているのだから、当然色の面を使うだろうと思ってるけど、見事に裏切ってくれるんですね。このように、子どもたちがやってくれたことで気づくとか、こちらの見方が広がることがありますね。

西村 授業を改善していくために、子どもたちの声を受け取るのは重要ですね。

山田 先生ってどうしても授業をつくらうとしてしまうんですよ。かわりをもたせるとなると、そこに意識が向きすぎて仕込みすぎるといえるか、そういう場面を無理矢理つくらうとするというか……。

西村 形式的なかわり方になりますよね。でも、本来子どもは喋りたいし、かわりたいという思いがあるじゃないですか。そういう子どもの思いをどう授業にしていけるかが大切だと思いますね。

山田 一方では、先生と子どもの関係性が違うと、同じ指導案でも全く展開の質が変わるということがありますね。

西村 そうですね。特に今回のような授業は違うでしょうね。

山田 子どもをどこまで受け入れるのか。時には「それは違うよ」と返さないといけないこともあるし、子どもと先生の関係性がどんな形で成立しているかが大きく授業に影響してきます。今日は、西村先生と子どもたちのいい関係性を感じましたよ。

西村 この授業を次にやったら、全く違うものになるでしょうし、ほかの先生がほかの子どもたちとやっても全く違うものになると思います。僕は、それぞれの先生がその場所で作るというのが授業だと思います。

すね。研究授業を見て、要素をもち帰ることとはできるかもしれないけど、関係は自分たちでつくることですから。

**山田** やっぱり授業はライブだよな。

**西村** そうです。ライブなんですよ。

**山田** 新しい題材を初めて実践するときには緊張するけど、最初が一番面白いもんね。今日もドキドキした？

**西村** ドキドキしました。今までこういう形ではやっていなかったの。今朝変えたんですよ。

**山田** 西村先生はそういうことするよね(笑)。

**西村** 昨日の晩からいろいろ考えていて、やっぱりギリギリに降りてくるんですね(笑)。

**山田** 我々はひたすらそれを信じているから(笑)。もう直前まで準備しながらずっと考えているものね。

### 図工のつくりかた

**山田** 今回は、あるものを何かに見立てると、つくったもので人とかかわるといふシンプルな内容だけど、だからこそ本当のその子らしさが出るのを感じさせてもらえた授業でした。

**西村** とくに今回は枠がある程度決まっています、活動もシンプルでした。学習の主題がぶれないようにするのが大事だと思えますね。つまり私がやっていることとあなたがやっていることには共通の何かがあるという部分がなければ、今日のようなかかわりは生まれませんじゃないでしょうか。

**山田** 枠の捉え方は難しいところで、子どもが発想したことをどんどん展開していくと枠がなくなってしまう。この活動で共通して取り組むべき内容は何かというのを先生がしっかりもっていることが重要ですね。

**西村** 力量が試されますね。

**山田** そうですね。授業の型に子どもをはめようとするんじゃないで、子どもたちの意識がどうつながっていくかという考え方で授業をつくるように心がけたいよね。

**西村** やっぱり自分でその授業自体を面白いと思っていることが、原点としてとても大切だと思いますね。

**山田** ええこと言うね。

**西村** いえいえ(笑)。でもね、それがなくなったら終わりがな。絶対面白いはずと思ってしまう。授業は一方的なものではなくて、子どもたちとのコミュニケーション、対話なんですよ。そこでどんなやりとりが起こるかなということを考えていけば、授業ってどんどんうまくなるんだろうなと。

**山田** いろんなことが起こるか楽しみにしているってことだよな。

**西村** そうですね。それは日頃から子どもとかかわりをもっていないと見えてこないものだと思います。

### 授業を通して培われるもの

**山田** 今日みたいに自由に立ち歩くのが許される、またそれを求められるって、図画工作以外ではなかなかないことだよな。この教科では自分から積極的にかかわって

かないと開けていけないですもんね。

**西村** 自分の中の生のところが表現として出てくる教科だけに、すぐリアルなかわりがありますよね。喋らなかつたら、つくりなかつたら見えなかつた自分や友だちの思い、それがもろに「もの」として現れますからね。そこを常に見ながら、かわりながらやっているのが図画工作ですの、そういう意味では、子どもも先生もいつも舞台上に立たされているような授業だと思っんですよな。つくりなないと始まらないし終わらない、そういう切実さを抱えた生の教科だということを見てもええたらと思います。

**山田** そうですね。違う価値観と出会える場じゃないですか、図画工作って。それは社会に出てからも必要なことですよな。共通した価値観に取めない、違いを認める、受け入れることを常日頃から行っている教科だから、自己を認め他者を受け入れる資質を培うことができるのではないかと思っますよ。

**山田芳明** やまだよしあき

鳴門教育大学大学院学校教育研究科准教授  
平成二十二年 特定の課題に関する調査結果分析委員会委員(小学校図画工作 文部科学省)  
図工授業づくりユニオン 西地区代表

**西村德行** にしむらとくゆき

筑波大学附属小学校 教諭  
小学校学習指導要領解説図画工作編作成協力者  
図工授業づくりユニオン 東地区代表

# 「設場の定」

## 地区展覧会編

文とイラスト  
山本幹雄  
神奈川県茅ヶ崎市立松林中学校

### 展示で魅せよう！

私たちの地区では、「一クラス分作品研究」を三十年以上続けています。一クラス全員の作品を介して自分の授業をさらすことで、自分の授業を鍛え、地区の美術教育の充実につなげています。その成果を毎年、「地区美術作品展」に展示しています。この展示も皆で改良を重ねて、共通認識を作り上げてきました。そして十年前からは、三週間に及ぶ美術館での開催を実現しています。

### 作品を観せる

作品が持つ魅力を邪魔せずに、その魅力をよりひき出した展示にしたいものです。平面作品がいきるように、台紙の色は「無彩色」、名札も学年数字と氏名を入れる統一スタイルにしました。また、

立体作品は、展示台に台紙や掛け布を用いてより立体を引き立たせる工夫が欠かせません。さらに、支えを用いて台から浮きあがらせる工夫もしたい。もちろん壁面も効果的に使いたい。

### 授業を見せる

作品展示はそのまま授業の展示でもあります。授業での多様な展開が見える作品数が必要です。同一テーマであっても、授業者によってまったく違うものになります。ひとまとまりの作品群から授業者が見え、子どもたちの、そして授業者の取り組みが浮かび上がります。

### 思いをみせる

思いと、それを支える表現技術と支持体によって作品が成立します。展示の解説では、授業テーマや材料・技法・時間

数の情報のほかに、その授業の意味づけと子どもたちのワクワク感が結びついた課題解説が有効です。見やすい大きめの文字を用い、目の高さでの掲示をしましょう。子どもと授業者の思いが一体となったコピーの創造が、観る者にその授業の内的な感動を届けます。

### 鑑賞者の声を聴く

鑑賞者に展示がどう届いたのか、また、どのような要望があるのかを確かめるために感想を書いていただくことも重要です。何のためのどのような展覧会なのかを説明する開催趣旨の掲示や配布とともに、受付で感想用紙を手渡しすると多くの声が集まります。そこから私たちは、反省と感動と勇気もらい、日々の授業への励みと次期展覧会への指針を確かめることができます。



\* 浮かせてみせた！ーウラモオ作  
木彫ー落ち葉ー



\* 自作に種痘をつけてみよう。



# 先 見 る 之 凡 目 凡 第 四 回

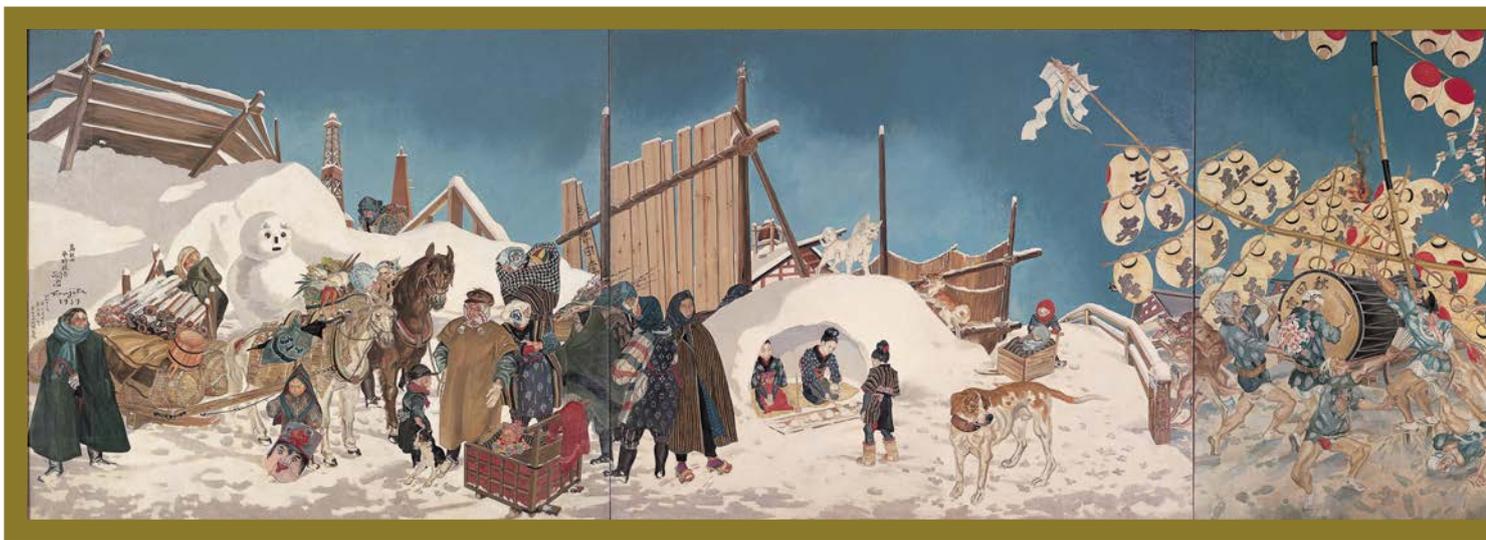
## 秋田に見た夢 — 藤田嗣治の壁画 —

東北・秋田で四季折々、練り広げられる祭礼や年中行事を描き出した藤田嗣治の壁画《秋田の行事》。二〇一三年九月、この作品はリニューアル移転した秋田県立美術館に移され多くの人々の眼を楽しませている。

藤田の三十年代を代表するこの作品は、地元秋田の豪商・平野政吉との交友から生まれた。平野から「世界一の画家なら世界一の絵を」と求められ描いた作品は、画面の高さが三・六五m、幅が二〇・五mにも及ぶ。画面右から、置山を背景にお囃子の賑わいが響き渡る日吉八幡神社の山王祭、巨大な梵天がひしめく太平山三吉神社の梵天奉納、そして民衆のエネルギーが渦巻く年中行事の竿灯：これら秋田に伝わる民俗伝承の祭礼行事が、横長の画面に絵巻物のように展開している。

しかし、ここに描かれたのは祭の情景だけではない。画面左に眼を向ければ、祭の喧騒と対照を成す静穏な冬の情景。それは、長い冬、深い雪に覆われる秋田の日常そのものであり、民衆のエネルギーが解き放たれる非日常的な祭礼と、厳冬に耐える人々の日常とが鮮やかに対比されている。背景には秋田杉や油田の樽、手前に見える橋は、秋田城のあった高清水丘陵にかかる秋田の歴史を象徴する「香櫓木橋」である。人々が纏う秋田伝統の緋や縞木綿、米どころを象徴する米俵や酒樽、そして藤田得意の動物描写の筆が冴える犬た





ち。画家は祭礼行事だけでなく、秋田の産業や物産まで描き尽くそうとした。

この絵を描いた頃の藤田は、名声を得たパリでの生活に区切りをつけ、二十年ぶりに故国日本に定住して新たな制作の方向を模索していた。時代は、欧米風の近代的生活様式が暮らしを大きく変える一方、軍国主義を背景に高揚する国粹主義が日本固有の風土や民族性を称揚する風潮を生んでいた。そうした日本の国土に備わる美質を自国民だけでなく、広く世界に向けて訴えかける手段として壁画は最も相応しいものであった。「政府機関、劇場、デパート、街頭、物産陳列場などに当地の風俗、祝祭、産物等を壁画として表すことは、観光客に対する日本固有の知識や美術紹介の最良策である」と語る藤田は、秋田という地方の残る風土や文化を壁画のミニユメントルな大画面に描き留めようとしたのだろう。制作の前年、秋田・角館町を訪れた藤田は後にこう記している。「吾が国の伝統の美しさ、郷土の素朴さ、清く澄み透すこの人々の心は、戸外の一丈にも余る雪の肌のように純であり貴いのである」藤田が秋田の風土に見たのは、明治維新以降、ひたすら近代国家を目指す日本で次第に失われつつあった、民族の故郷としての地方であった。それは、欧米で国際的画家として活躍し、中南米各地を巡って広く未知の文化を体験した藤田の深い思念があつて初めて描き得た作品だったといえよう。

佐藤幸宏 さとう・ゆきひろ

一九五九年新潟市生まれ。北海道立文学館学芸主幹。成城大学大学院文学研究科博士課程前期修了。企画した展覧会に「没後四〇年レオナルド・フジタ展」(二〇〇八)、「藤田嗣治と愛書都市パリ」(二〇一〇)、「壁画」(秋田の行事)からのメッセージ 藤田嗣治の一九三〇年代」(二〇一三)など。

#### 秋田の行事

[油彩・キャンバス / 365 × 2050cm]

1937 藤田嗣治 [1886 - 1968]

公益財団法人 平野政吉美術財団

©Fondation Foujita / ADAGP, Paris & JASPAR, Tokyo, 2013 E0836



# 授業実践

学びのフロンティア

小学校3・4年向き

## 自然材を見つめるまなざし

三つの実践を通して

千葉県香取市立佐原小学校 玉井弥生

### ねらいと子どもの学び

豊かな自然の中で生活していると、かえってその美しさや面白さに気づかないと感じたことはありませんか。日本は四季の変化に恵まれた美しい国です。田舎の自然はもちろんですが、都市部の街路樹や公園の植栽も四季が演出できるように考えられています。恵まれたその環境を生かして造形活動の中に取り入れると、子どもの感性への働きかけによって表現の可能性が広がります。

### 自然はアート

#### ―三つの授業実践―

##### ①アースワーカーとの出会い

―鑑賞する活動―

鑑賞として、アースワーカーの作品を取り入れました。「アースワ

カー」とは、その名の示す通り自然を材料として造形活動をしているアーティストたちのことです。作品パネルと出会った子どもたちは、自然材のよさや面白さに引きつけられ、やがて、自分もやってみたいという欲求がわき上がってきます。作品の葉一枚、枝一本に込められた作者の思いを感じ取るこの鑑賞活動は、落ち葉一枚をも宝物に変えていきました。

##### ②「ちびっこアースワーカー」になっちゃおう！―造形遊びをする活動―

校庭へ飛び出していった子どもたちは、思い思いに自然材と向き合います。色にこだわる子ども、形にこだわる子ども、ひとりで、集団で、それぞれが自分なりのこだわりや物語を表現していききました。これまでも自然材を使つての表現活動は行ってきていましたが、今回は一枚の葉でも自分のイメージに合うものをさがし、大切に扱う様子が見られたことから、子どもの心の変化を見

取ることができました。

子どもたちの表現活動は実に様々で、見立て遊びを楽しむ姿や、風景を利用する姿、箒や熊手の掃き目を利用する姿、二階のベランダから見ることを想定してつくる姿など、自分なりの表現活動を十分に楽しんでいました。

教師は、それぞれの活動を見守りながら、「今、この子はどんなことをしたいのか」「何にこだわって活動しているのか」「何に共感してほいいのか」を常に意識して、評価するまなざしをもつことが大切です。あくまでも、活動の主役は子どもです。決して教師（大人）の価値観で評価しないよう、子どもの心に寄り添うことを心がけたいものです。

図工の時間が終わった後も休み時間まで活動は続き、大がかりなものも作りました。その際も、材料に対する扱いの丁寧さが感じられました。

##### ③「ネイチャー・ミュージアム」をつくらう！―工作に表す活動―

アースワーカーの作品鑑賞、自然材を使つての造形遊びを経て、最後は工作に表す活動として、自然材を扱いました。これまでの体験や経験が生きた技能となつて子どもたちの身につけていけば、材料を見つめる目が養われ視覚的コミュニケーションが図れるはずですよ。

ここではまず、自分の作りたいテーマを決め、箱の中にミュージアムを構想し、それを実現するための材料収集をすることから始めました。ドングリ一粒や、小さな枝一本の形、木の葉一枚の色にもこだわる姿や、イメージに合う材料を探して友だちと物々交換する姿には、アーティストさながらのこだわりが十分感じられました。

ここでも、つくっている過程で新たなアイデアが生まれ、最終的にはミュージアムからどんどんイメージが広がり、迷路になったり不思議な世界が出来上がったりしました。大





### 授業を終えて

年間を通して指導計画の中に「自然材」を取り入れたことで、段階を踏んで徐々に視覚的コミュニケーションが図れるようになり、自然が身近な存在になりました。「こんなにきれいな落ち葉があったよ」「この実は何だろう」と、子どもたちが大切に握りしめてきた「お宝」で朝から教室は大賑わいの毎日です。「さて、今日は何を持って来るかな」と、私も図鑑片手に楽しい毎日です。

「先生、佐原って自然がたくさんあるよ」

「あつていいね」。この言葉が聞けたとき、体験して得たことは、確かに感性の豊かさにつながるのだと実感しました。

指導計画	
「ちびっこアースワーカー」になっちゃおう！	
時間	2時間
領域	A表現(1)
材料・用具	自然材・箒・熊手など
学習目標	身近な自然材に愛着を持ちながら活動することで、形や色といった特徴やよさに気付く
主な学習内容	●自然材を並べたり組み合わせたりしながら、自分なりの表現活動を楽しむ
主な評価の観点	●自然材の特徴やよさを感じ取り、自分の表現に生かそうとしている(造形への関心・意欲・態度) ●自然材を生かして、どのようなことができるか思いつき、思いを巡らせている(発想・構想の能力) ●自然材を自分のイメージに合うように工夫して使っている(創造的な技能) ●自分や友だちの表現のよさを味わっている(鑑賞の能力)



※②のみの指導案。①、③の活動についてはWebにて公開予定です。

# 授業実践

学びのフロンティア

中学校 2・3年生向き

## カラーサウンドスケープ

音を聞き、音のイメージから発想して、心の形を描こう！

静岡県駿東郡長泉町立北中学校 夏目幸弘

### はじめに

「この絵は、カンディンスキーという画家の『インプレッションⅢ（コンサート）』という作品です。カンディンスキーは、一九一一年、作曲家シエーンベルクの演奏会に行き、シエーンベルクが作曲した『三つのピアノ曲』を聞きその衝撃的な音楽に感激し、そのインパクトをすぐさま絵画に表現しています。シエーンベルクが作曲した『三つのピアノ曲』とは、どんな曲だったのでしょうか、想像してみてください」

こんな投げかけから始まる美術の授業では、生徒がカンディンスキーの絵画を鑑賞し、絵解きクイズのようにシエーンベルクの音楽はいったいどんな音楽だったのかを想像します。生徒たちは、画面の中に、音楽に聞き入る聴衆の頭部らしきものや、グランドピアノを想起させる黒い三角形を見つけ、黄色や青色、橙色などの色から、いくつかの音が混ざり

あった曲ではないかと想像をめぐらせませす。意見を交わす言語活動を通じて、カンディンスキーの絵画とシエーンベルクの音楽の有機的なつながりを紡ぎ出していきます。

### 手立てと子どもの学び

「インプレッションⅢ（コンサート）」という一枚の絵画の鑑賞からスタートしたこの授業では、その過程で、シエーンベルクの音楽を鑑賞し、一生かけて音楽と絵画の関係を探究したカンディンスキーについて学び、生徒たちにもシエーンベルクの音楽を聞いて受けた印象を色鉛筆で表現させます。その後、さらに新たな音源を聴いて自分だったらどんな表現ができるのか、それぞれの活動に返していきます。

制作にあたっては、多彩なリズムをふんだんに用い、刺激の強い表現、音の強弱など、様々な風景やイメージを引き出しやすいことからムソルグスキーの交響詩「荒山の一夜」リ

ムスキー「コルサコフ版を音源としました（冒頭部と終結部に分けて聞かせる）。また、音源から感じ取ったイメージを明確にするために、学習指導要領の（共通事項）から導き出した「色あい・形・明るさ・全体感」の四つの視点を設けました。そして、全身を使ったダイナミックな活動を期待し、表現手段としてハンドペインティングを選択しました。生徒たちは、その直感的なイメージ



紙を縦10cm×横45cmの白ボール紙（冒頭部、終結部それぞれに対し各一枚ずつ計二枚）を横に使ってハンドペイントしていきます。

続いて、ハンドペイントした白ボール紙の帯を、ハサミを使って自分のイメージに合う形に細かく切って台紙に貼っていきます。音源から受けた直感的なインパクトを大切にしながらも、構成の原理を考慮して作品作りをするよう指示し、特に今回のカラーサウンドスケープの構成で使用頻度の高い「コントラスト・アクセント・ムーブメント」の三つの構成美の要素について具体的な例を挙げ説明しました。

「冒頭部」と「終結部」を同時に流し、二つの音楽が融合した第三の音楽から受けたインパクトを「構成美の要素」を考慮しながら台紙に貼ったカラーピースの上から、さらにハンドペインティングを施していきます。

作品鑑賞では、友だちの色彩や形による表現の良さ、友だちの主題と





指導計画	
時間	7時間
領域	A表現(1)(3) B鑑賞
材料	白ボール紙、絵の具、ハサミ、のり
学習目標	音楽を聞いて感じた印象を全身の感覚を使って表すことを通じ、聴覚、触覚などを活用した「総合的な造形力」を養う
主な学習内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>●元になったシェーンベルクの「三つのピアノ曲」を想像しながらカンディンスキーの「インプレッションⅢ(コンサート)」を鑑賞する</li> <li>●「禿山の一夜」を聞いて感じたことをフィンガーペインティングで表したものを、再構成する</li> </ul>
主な評価の観点	<ul style="list-style-type: none"> <li>●音楽を聞きながら感じたことを絵に表すことに取り組もうとしている(造形への関心・意欲・態度)</li> <li>●音楽のイメージをもとに、「色合い・形・明るさ・全体の感じ」などを意識し構想を練っている(発想や構想の能力)</li> <li>●ハンドペインティングの形や色彩の感情効果を意識して表し方を工夫している(創造的な技能)</li> <li>●作品を見合いながら、友達の違いを感じとっている(鑑賞の能力)</li> </ul>



今回の題材では、まず「鑑賞と表現の有機的なつながり」を軸に指導計画を立てました。鑑賞の活動がそ

### おわりに

その工夫について「色あい・形・明るさ・全体の感じ」の四つの視点に沿って説明し合い、今後の自分の表現に生かすよう示唆しました。

の後の表現活動に生きるような組み立てにしました。また、音源を聞いて受けた印象を、直感的な感覚を大事にしながら自分の色と形で表現する創造的な自己表現を目指しました。制作にあたっては、フィンガーペインティングを選択し、指からダイレクトに伝わってくる感覚(触覚)や手や腕を通して紙の上に独自の世界を直に伝えていく感覚を生徒には感じさせたいと思いました。

最後に、こうした聴覚や触覚といった全身の感覚を通じた経験が生徒一人一人の感性を呼び覚まし、「カラーサウンドスケープ―音の風景―」の活動を通じて、表現することの喜びを知り色彩と形による「総合的な造形力」が少しでも培うことができると願ってやみません。

1

127,338,621

文：田野隆太郎 写真：新井卓

第四回

# 203gow

社会に無用なものだけを作っている。

そう胸を張り宣言する作り手がネットから飛び出してきた。

名を203gow。専門は編みものだ。

従来の手芸観をくつがえす奇抜な作品群。

それは、わたしたちが有り難く受け取ってきた

アートの牙城を揺るがす力を秘めている。

ギャラリー「バラボリカ・ビス」にて撮影。



美術館やギャラリーで、絵や彫刻と向かいあう。自宅やカフェのソファでくつろぎながら、画集をペラペラとめくる。数百年前の作品も、今やスマートフォンで歩きながら眺めることもできる。そんな風にアートを消費しながら、はたと思い直すことがある。アートは、社会にとつて本

当に有用なものなのだろうか、と。それらは洗濯機や掃除機といった日常的に使うものとはちがう。もちろん食器や花器のような工芸分野では、生活に応用できるものだってある。しかし日常を彩るだけの要素なら、それがこの世に無くなったってわたしたちは生きていける。そう言くと、アートを至上のものと考えてきた方々にこう論されるかもしれない。芸術は日常生活で抑圧されがちな人生の機微を救いと、わたしたちを非日常の世界へと解放してくれる必要不可欠なものだ。しかし、あえて反論してみたい。金銭と引き換えにアートを鑑賞することができ、そんな好事家だけに許されるような贅沢なら、いっそ無くしてしまえばいいのではないか。わたしたち鑑賞者は芸術作品をありがたく享受しながらも、深層心理ではそれらを用意なものだと感じている。不況の世を

忙しく生きる人たちなら、なおさらそう考える。

## ネット発信された 新しい作り手

ここに無用なものだけを作ると宣言するクリエイターがいる。2030年。にいまるさんごう、と読む。もちろん本名ではないし、その名に特別な由来もない。団塊ジュニアのひとりの女性だ。「編みもの」という日常生活に密着したジャンルにおいて、まったく必要のないと思われるものばかりを作っている。水道の蛇口、糸ノコギリ、缶のプルタブ……彼女が好んで取り上げてきたモチーフだ。作品を公表したのは十年近く前。コンテストやギャラリーではない、自身のSNSにアップしたのが最初だった。それまでは発表の意識なしに編んでいた。溜まるだけの作品にみかねた知人が、ネットに載せてみたらというアドバイスくれたのだ。そして、いざネットのふたを開けると多くの人たちが集まってきた。地域や年齢、国籍までも異なる、独特の臭覚を持つ人たちだった。彼らは面白がり、頼まれもしないのに作品写真をそれぞれのSNSに貼り直した。結果、それが彼女が周知されるきっかけとなった。今ではファッションブランドの店舗装飾や、著名音楽家とのコラボレーションが舞い込むほどだ。

彼女はそんな状況を「ネットのへ

んな人たちに引っかけられて、ここまで来てしまったんです」と笑う。その「来てしまった」という言葉に、作り手が理想的な私たちで社会に受容された幸運と当惑、両面が垣間見える。名誉や商業性に傾きがちな業界にあって突然変異種のような佇まい。作者自身として作品自体も、過去の芸術家のように大上段には構えず、気負っていないのだ。

彼女は、北海道の日高地方に生まれた。隣家までは数キロの大自然。気づいたら、ひとり遊びの多い子供に成長していた。木片をカッターで削ったり、おもちゃの弓矢も竹で自作。工夫して作ることは当たり前で、衣服がほつれたら繕い、ドアノブのカバーも作った。編みものが得意な祖母が、いつも脇にいてくれたことも大きかった。高校は隣町まで列車で通った。今度は、高校近くの書店で見つけた日本や海外のファッション雑誌にのめりこんだ。始めは個人的なファッション自体に魅了されたのだが、次第に紙面作りに興味を持つようになった。

広告やデザインを学ぶため、札幌の専門学校へ進学した。当時、グラフィックデザイン界はコンピュータでの制作がまだ一般的でない時代。若いクリエイターにとつて、現在のようにネット上发表できるような場はなく、名の知れたデザイナーだけが活躍する世界だった。だから、デザイナーとしての進路を選ばず、反

対に広告業界に発注する仕事をした。思い、企業の企画宣伝部に就職した。従事したのはプライダルやデイナーショーの制作。代理店との打合せから、チラシやポスター撮影にかかわる一切を経験した。だがその間、今へと続く編みものも始めていた。当初からマフラーや手袋などの実用的なものには興味はなく、彼女曰く「海岸に打ち上げられた網のような形にならないもの」ばかりを編んでいた。編み方もわからず、ただ闇雲に糸と格闘していたのだ。

自分の可能性を試すために課題を課し、手を動かしながら。そうすることで、彼女は編むことが自分にとって夢中になれることなのだとわかった。なぜだかわからないがそうしてしまう。その「なぜだかわからない」が重要だ。なぜなら、そこには目的というものがなく、もしニットデザイナーになるという目的があったら、普通なら上京して服飾の専門学校に入り直そうと考えたかもしれない。無駄とも思えるものを盲目的に作る。そこには、わたしたちが通常考える上昇志向と、作品それ自体においての作為性を生まなかった。ゆえに、注目される存在になつたといえる。評価されていない、手垢のついていない生(レア)なもの面白がってくれる層がネットの中にいたのだから。「ネットがなければ、そのままだったんでしょね」と彼女は正直に述べた。

ひとりで作るものの  
楽しみと悩み

最近の仕事を紹介したい。全長八メートルのイカ、足一本が二メートルのタコを編んだ。イカをアートイベント、タコを子供服企業のイベントで飾った。公共性のあるイベントと商業的なイベント、相反する分野で同様のシリーズを展開できるという自由はなかなか獲得できるものではない。オーダーの多くは「この空間を埋めて欲しい。それだけなの」と彼女は笑う。しかし、悩みもないわけではない。広い空間での展示になれば、作品自体も大きくならざるを得ない。彼女はいつもひとりで編んでいる。設計図が出来たものをわざわざ作りたくはないので、編み図は描かない主義だ。だから、助っ人に任せることはできない。彼女自身他の何よりも編むこと自体を楽しみたいという思いが強いのだ。

自分ひとりで作る場合、途中失敗しても、それを今後どう変化させるかという偶然性を楽しむ方向に進むしかし、皆は一度ほどき直し、見本通りに作ろうとしてしまう。それがワークシヨップなどで受講生と対する時に感じるジレンマだ。「自分のイメージを人に伝えることは難しいんですよ」。彼女は根っからの作り手で、自分ひとりで編むことが好きなのだ。彼女にとっては、それが何よりも夢中になれることなのだ。もちろん簡単に商いにつながるものではない。



思い立ったらすぐに編み始める。フットワークの良さとスピード感も持ち味。

い。だからわたしたちは彼女を見て、その打算のない仕事に驚き、感動するのだといえる。冒頭の説、あれは逆説なのだ。アートは、社会にとって無用なものを作るからこそ価値がある。そう言いたい。しかし、自分の作品が社会にとって有用なものだ、

そう思いたい作り手の傲慢が顔を出すことが多いのも事実だ。どれくらいの手が、社会にとって必要のないものを作っていると胸を張って言えるのだろうか。

「日常生活とともに編んでいるわけだから、途中で手をとめる時もある

の。再開したら、また見え方がちがってきて新鮮に思えたり。完成形を想像して編んでも、思わぬ方向に勝手に進んでいく場合があって、そっちを生かして編み進めることもあるんです。要は、糸の行きたい方向へ進む時に、わたしにしかわからない面白さとおかしさがあるんです」

203gowは「編み師」を名乗っている。時には、アーティストやニット職人、手芸作家と呼ばれ、それは変化するものでいいと彼女も考えている。しかし自分の仕事には、制作から会場設営まで一貫して責任を持ち、「編み師」と呼ばざるを得ない幅広い活動だ。最後に自作を再度考察してもらった。

「展示された期間中は必要とされていてキラキラしているが、終わったら完全な廃棄物ですよ。依頼があるから必要とされているということでも……でもそれは企業向けですよ。自分でこっそり作るのは、いらぬものです。でも、わたしがわたしを喜ばせるためのものだから、必要なものですけどね」。周囲と一定の距離を取りつつも、自分に充足を感じている。これがアーティストに関わらず、現代社会に暮らすわたしたち自身にとってもなかなか取れないスタンスなのだ。

203gow にいる人たち

風変わりな編み物作品。へんなあみものを作る編み師。街中を編み物で埋め尽くすゲリラ集団「編み奇襲団」を立ち上げる。大手ファッションブランドの店舗展示や、美術館でのワークシヨップ等多数。

# ●ともに学ぶ

## 図工・美術の先生と子どもが、ともに作りだす学びの日々。

### ●思わぬ方向へ

図画工作の授業で、子どもたちが思わぬ方向に進んでしまうことがあります。そんな失敗談の一つです。

六年生の授業でスチレンボード版画をしました。本番の前に、練習用の版を使って刷りの表現を試す時間を設定しました。活動が始まると子どもたちは我先にとローラーを使い始めました。一枚刷っては違う色のインクの場合に行き、「おおっ」「すごい」「きれい」などの声を発しながら、どんどん刷っていききました。確かに版画と言えばローラーが思い浮かびますが、私としては絵の具を使うたにじみ、刷り重ねや、版の分割・再構成など、スチレンボード版画ならではの様々な技法を試して欲しかったのです。人気の色には行列ができ、他の用具を使う子どもはほとんどいませんでした。ローラー以外の技法も試すように呼びかけましたが、もう止まりません。恐るべきローラーの魔力にとりつかれた子どもたちは、手や服をインクだらけにしながら夢中で刷り続けていました。

活動が終わわり、山のように試し刷りをした子どもたちに「楽しかったかい」と聞くと、満面の笑みを浮かべて「は

い」と答えました。彼らの目の輝きに、造形教育の原点を見た気がしました。…もちろんもう一度、今度はローラー以外のことも試す時間を設けましたが、群馬県沼田市立沼田小学校 川端郁男

### ●「ともにつくる」を「つくる」

合唱のように、ある一点の空間と時間に向け、練習し準備して、その瞬間にみんなできつくりあげる、そんな体験を美術でできないのだろうか？

そんな漠然としたアイデアに光をくれたのはトーチカという現代美術作家でした。その作品は多様で、長時間露光させた画像を一枚の絵や物語や抽象作品に昇華させ、参加者が一つのアイデアを共有していることもあれば、全くバラバラのこともあり、それは音楽や映画のようであり、アニメのようにも感じました。光は色となり、動きが形となり、ネオン管のような独特な質感を持っています。

歌を歌うように、音を奏でるように、発想を地球上のある一点に集結させることができる素材になるかもしれない。学級、学年、学校という単位で、「と

もにつくる」体験を「つくる」ことができるかもしれない。

全校生徒で制作することが決まった時、職員は不安に、生徒は期待に包まれていました。一枚目を撮った瞬間、生徒たちの歓声があがります。「つくる」ことのよここびは、「ともにつくる」と化学反応を起します。その瞬間に消え去る感動を共有し、形に残すことが、美術にはできません。

学校に二人しかいない美術教師、私がやらなきゃ、誰もやりません。山形県山形市立第七中学校 池野吉洋

### ●試行錯誤しながら関わる

今、新任当時のことを思い出すと、不器用な指導に恥ずかしくなるばかりです（その時は必死だったのですが…）。

「なぜ、これくらいのことのできないのか」「なぜ、これくらいのことか理解できないのか」、自分の中で当たり前だと思っていたことを「ここ」で崩されてしまう毎日でした。自分自身に余裕がなく、若さと情熱だけの指導だったと思います。とにかく作品を仕上げさせようとしていた時期や、自分の指導の型

にはめようとしていた時期もありました。うまくいくはずはないのですが、その時は自己満足していたような気がします。

美術を苦手とする子どもたちの興味や関心、意欲を引き出すことは本当に難しいことです。教科書通りにいくはずはありません。時には子どもたちとぶつかります。しかし、子どもたちの「中学校美術」に関わるのは自分なんだという信念をもつことが大切です。試行錯誤しながら関わることで、やがて卒業生から「先生によう怒られたなあでも、楽しかったで」という言葉が返ってきます。教師として何よりのほめ言葉だと思えます。

教科指導が一番であることはわかっていながら、他の指導が優先になってしまふことが幾度となくありました。それでも原点は美術の教師であることを忘れずに取り組んできたつもりです。

時代は変わり、指導方法や教材がどんどん新しくなります。それでも変わらないものは、子どもたちとのふれあいです。今日も美術室から明るい笑い声が聞こえてきます。次の作品の仕上がりが楽しみです。

大阪府大阪市立田島中学校 校長 石川文字



小学6年  
1年のときからよく通った  
校舎の通路

[絵の具/39×54cm]  
[図画工作5・6下]P.10掲載



中学2年  
となりの夕日

[ポスターカラー/38×27cm]  
[美術2・3上]P.11掲載

### 児童・生徒作品 私の見方

小学生の作品は友だちがいつぱい描かれ、建物自体もキュビズム風に歪んでいます。陽光と影が戯れる躍動感に満ちたわくわくする楽しい回廊です。

中学生の作品は内省的な清らかさと静けさが支配する薄暮の一時の風景を描いています。遊びが生活だった子ども時代と別れを告げ、今は現実の中で目前に押し寄せる課題を相手に格闘する毎日でしょうか。そこにあるのは思春期特有の暗さと閉塞です。しかし全く思いがけず、幼い頃から馴染んできた街路の上になんか明るく清澄な空が未来を暗示するかのように拡がっていました。過去と未来が繋がり合う調和の中に自分が取り戻されじんわり安心感と勇気が満ちてきます。

どちらも、手前から奥の方へすぼまってくいように続いていて、そこに時間の流れを感じます。遠近法的構図によって、空間の拡がりや表せることはよく知られていますが、時間も表現できるとはなんだか不思議な気がします。画面の手前には今の自分、見通せない奥には遠い昔の自分が潜んでいるようですよ。

みなさんは、どのように感じますか？

文 新潟大学 教授 佐藤哲夫

## 形 forme No.301-2014

日文教育資料 [図画工作・美術]

平成26年(2014年)1月31日発行

編集・発行人 佐々木秀樹

発行所 日本文教出版株式会社

大阪本社 大阪市住吉区南住吉4-7-5 TEL:06-6692-1261

本書の無断転載・複製を禁じます。

Cover photo: Kazue Kawase (YUKAI)

Design: Kazuhisa Yamamoto (Donny Grafiks)

CD33218

## 日本文教出版 株式会社

<http://www.nichibun-g.co.jp/>

大阪本社 〒558-0041 大阪市住吉区南住吉4-7-5  
TEL:06-6692-1261 FAX:06-6606-5171

東京本社 〒165-0026 東京都中野区新井1-2-16  
TEL:03-3389-4611 FAX:03-3389-4618

九州支社 〒810-0022 福岡市中央区薬院3-11-14  
TEL:092-531-7696 FAX:092-521-3938

東海支社 〒461-0004 名古屋市東区葵1-13-18-7F・B  
TEL:052-979-7260 FAX:052-979-7261

北海道出張所 〒001-0909 札幌市北区新琴似9-12-1-1  
TEL:011-764-1201 FAX:011-764-0690